骨

香具土泰道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
骨

【Ｎコード】
Ｎ９１９２Ｇ

【作者名】
香具土泰道

【あらすじ】
ＰＣからのアクセスを推奨します。幻想小説。死して霊となったのち、自分の死体の前から離れられないでいる男の物語。※公開より一年前に書いた作品です。

ホラホラ、これが僕の骨――
見てゐるのは僕？　可笑しなことだ。
霊魂はあとに残つて
また骨の処にやつて来て、
見てゐるのかしら？

中原中也「在りし日の歌」収録「骨」による。

霧雨が舞い降りてきた。私は血を雨がぬらすのを茫洋と眺めながら、その眼下にあるむき出しの遺骸から、なにを思うでもなく眼をそらせずにいた。

遺骸はすでに生を失ってからそれなりの時間が経ったように、腐って黒ずんだ有機物が食器のしつこい汚れのようにこびりついており、そのいたる部分に蛆の蠢く様や、蝿が腐肉を食み、卵を産み付ける姿がつぶさに観察できる。雨水に洗われ覗く白骨が、先ほどの食器という連想を一層それらしくせしめた。

そのいびつで巨大な食器は……腐肉の汁に侵されており一瞬間では判別しがたいが、よく見ると上等そうなスーツをまとっている。洒落臭いライトグレイの生地は生前のその艶やかさを笑う如く赤黒い斑模様を造り、袖元の、嘴かなにかで啄ばまれたような跡は、カフリンクスを烏か何かがさらっていったのだろう。見ると耳たぶも左右で大きさが違う。首筋にも痛々しい傷痕が見受けられる。手指も左側が二本ほど足りない。そこに装飾品が施されていたであろうことは、至極簡単な推理だった。

彼は、仰向けで天に慟哭する如く、顎を突き出していた。叢原の

雑草を掴む手の、爪があったらしいあたりには、未だ湿気を含んだ土が詰まっている。今わの際に彼が永遠の平静ではなく、地獄の苦痛を味わっていた事だけは、それをみるだけでも推し量られた。

だが、そういった分析は、その胸元につきたてられたなんらかを見つけられなかった者がすることだろう。スーツをはだけた下に着込まれたワイシャツの、ちょうど中央より左よりに、身体に対して横向きに突き立ったそれは、墓標というには小さく、そしてきらびやかすぎて、そしてなによりに形がいびつすぎた。私は生前の彼が生前どんな神も信仰していなかったことを思い出して、作法も思い出せないまま曖昧に手を合わせた。

私は彼の前を辞すこともできず、不思議な倦怠にさいなまれながら、それまでと同じように彼を眺め続けた。それ以外にするべきことがない気がした。できない呪いのようなものがかけられたように、他の事が不思議なぐらい意識に上ってこなかった。

風が出てきた。雨足も次第に勢いを増して、さっきまで活発に繁殖していた蝿や蛆などはすでにどこかへと去ってしまっている。叢原の草は雨の重みにくたびれたような態勢をとり、木々も心なしかうつむき加減のまま、雫と葉の共演を奏でていた。そこにアクセントでもつけたみたく、遠くで狼のような獣の慟哭が聞こえたような気がして、私は溜息をついた。

空を見上げても天体は雲という寝巻きを纏い、たまの休みを享受しているようだ。ここに来てからそれを見ることだけを楽しみにしていた私は、再び溜息を吐く。

私は一個の霊魂だった。胡散臭い霊能者の言葉を借りるなら、自縛霊というやつのようだ。お察しの通り、私を縛るものは、目の前に横たわる、生前の面影などどこにも見受けられない一個の肉体である。つい先日まで、私が所有していた私そのものである。

私には、自分の死の瞬間すら、詳らかに思い出される。不思議な事だ、私は霊魂の消滅を悟ったあの確かな手ごたえまで覚えているのに、今ここにある主観とは、消滅したはずの霊なのだ。……ひょ

っとしたら、死とは霊の消滅ではなく単なる霊の分離なのではないか、ということが私にはあるときふいに思われた。だがどうもしっくりこない。死が霊肉の不一致であるというのは世間ではよく言われた話ではあるが、あの瞬間の感覚とは精神の一部もしくは全体が「引き剥がされた」というよりもまるで眠りにでも落ちるように「急に空洞になった」というほうがまだ私の中で納得できたのだ。たとえ分離していったのだとしても、その感覚は、自分から肉体を離れたような感覚とは呼ぶに足りえない。その霊の消滅を知覚した主観の自分が今ここにこうして在るということは、無論その消滅と矛盾する。だが霊とはなんだ？　その内面のみをフィーチュアした姿であると、人々は言うだろう。では内面とはなんなのだろう。霊体としての肉の投影だろうか。……いや、そんな不毛なことなどどうでもいい。死後の世界のことなど、死んでみてもわからないのだ。

とにかく、私が眼前に横たわる一個の自分を、先ほどから「彼」と表現するのは、それを自分と呼ぶことに上記のような違和感があったからだ。……自分？　そう、自分。果たしてここにある彼は本当に自分の姿なのだろうか。確かに生前の記憶は彼がかつて私であったことを証している。しかし極端なことを言うと、私は先ほどまで記憶のよりどころとしていた、生前の自分さえも猜疑しはじめていた。死の恐怖が、死後、私にこの不安を惹起したのだ。

私は腰掛ける事もできず茫洋と骸を注視し続けた。

果たして、私は混乱しているのだろうか。自分の死さえも疑わしくなってきた。死とは解放ではない。呪縛である。自分の死を自覚しながらもその真偽に踏み出せぬ。踏み出せば、文字通り自己の喪失という矛盾に囚われる。自我などなんの慰めになろう。自我など自己の一部である。死とは肉体の喪失であり、肉体とは自己の象徴である。死とは、たとえそこに自我が在り続けても自己が消滅したことを認めねばならぬ、二律背反のもとに成り立っている。もとより霊魂としてこの意識が女々しく在り続けた私を特例とすれば、自我の残らぬ場合であれ消滅が解放だとは到底思われぬ。消滅は永遠

に解くことのできぬ無我の呪いなのである。「無我の境地」とやらに存命時達することがもてはやされるのはその解くことの叶う呪いを自らにかけることにより、死の矛盾と同じようにして在る生の矛盾を、合理的に超越できるからなのだ。

生。……生！　なんと甘くとろける音色を奏でるのだろう。二度と手にすることのできぬその美酒は、考えもせずに空費していた時期の自分を殺してしまいたくなるほど得がたい。生とは、そして自我とは渇望し獲得されてしかるべきものなのだ。誰もが着床の時は我先にと生の権利を奪い合うため、本能レベルでの闘争に身をやつしたはずだ。得るために何億の可能性を犠牲にし、失えば二度と得られぬ至高の果実。それが生だ。生とは「あって然るべきもの」ではないのである。

だが、人々が生を手にしたのはその意思ではない。誰も生まれてこようと思って生まれた人間などいない。それなのに、ただ偶然自我が芽生えただけの彼らは、最終的な生を望む。死してなお、その意識の生存を望む。否、大概の者は意識の生存を妄信してすらいて、死後意識の幸福をも望む。特別な生を、有効期限が切れてからも引き伸ばそうという話だ。馬鹿な話だ、意識の消滅が死の定説であり、現世で何を行おうと死んだあと幸福になれるかどうか、わかる者などいるはずはないのに……

無我の境地というやつは、その無我で手に入れた生を得たまま、自我を撤廃することに、その重要性がある。生とは本能なのだ。だが、その生を護ろうとするのは理性なのである。この酷い矛盾を、先ほどと同じ表現を遣うと、合理的に超越するのがこの悟りとも呼ばれる行為なのである。自我を失くすことは、死と同じなのだ。死ねば肉体は風化し、崩壊し、自己は消える。それだけなのだ。

私はここで自分の考えに、あるひっかかりがある事に気づいた。先ほどから私は、死は意識の消滅と述べている。ならば、意識が消滅しない私は、一体なんなのだろう。私は確かに肉を失った。肉は自己の代表であることは、先ほど述べたし、自我があろうとそれを

包括する自己がないのならば、その意味などありはすまい、というのが私の考えだった。一縷の自我の残滓に翻弄される私こそ、矛盾の極致ではないのだろうか。

私の懊悩がエスカレートを始めたとき、私は風が露草をざわつかせたのを聞いた。波を描くその音はまるで警報サイレンのように、一定。私は背筋が冷えるような感覚を覚え、肉を失ってもまだ一部の感覚は健在である事を、皮肉に思って苦笑した。

だがよく聴くと、風の音ばかりではなかった。その響きの中に、それこそサイレンの音の旋律に似た、だが野太く低い音が混じっている。低い動物のうなり声だ。昔よく聞いていた覚えがある……哀願していたイヌ科の動物の、外敵をけしかける声に良く似ていた。

私は暫時、なぜここでそんな音がするのか分からなかった。数日間ここでずっとこうして自問していたが、見た動物に生存手段として威嚇を心得ている者はなかった。すべて、草を糧に生きているような弱い動物ばかりだったのだ。だからとは言わぬが、私は肉食動物がここに現れたという可能性に気づけなかった。

だが闇夜にきらめく二つの光を見た瞬間、視覚がすべてを理解させた。狼である。……彼は、暗黒の支配する草叢から、その白く映える気高い毛並みを出し惜しむように従容と覗かせた。

鼻をクン、クンとかがせながら、ゆっくり、ゆっくりと狼は私の遺骸へ、まっすぐ歩みを寄せてくる。その一歩一歩、湿った大地を確かに踏みしめる足取りが、優雅であり野性的でもある。私は刹那、直観した。間違いなく、彼は本能のみが機能するときに獲得される理性としか呼びようのない境地に至っている。本能がその合理性に目覚めた時、彼のような威容を纏うのだろうか。生存を中心とした本能、それのみが完璧なまでの合理性に裏づけさている印象。その崇高な自我を得るためには、崇高な無我が必要である、としか言いようのない、完成された機能美をにおわせていた。

彼は、そんなことを考えていることを知ってか知らずか、私から視線をそらさぬようにしつつ、警戒しながらこちらに近づいてくる。

……彼は、私を見ている……その腐肉と化してそこにある澱んだ器ではなく、霊体としてここにいる私に、目線を合わせてきている……なんということだ、彼には私が見えるのだろうか。

私が彼の眼力に射抜かれているうちに、彼はもう手を伸ばせば届く距離にまで近づいてきていた。私は、彼の登場のドラマティックさに気をとられていたが、すぐに彼の行動目的……すなわち彼の本能の指し示す行動に思い至った時、声にならない絶叫をあげた。残念ながら私の喉は空気を震わせず、それは周波として顕現しなかったが、彼は一瞬ビクリと動きを止めたあと、何事も無いことに気づいたのか、その足元に横たわる旨そうに腐った肉を、わき目も振らず貪り始めた。

どうする事もできなくて、私はただ呆然とその様を眺めていた。もう私の存在が彼に見えていようがいまいが、どうでもよかった。そんなことよりも、時のように団塊を踏んでゆっくりと褪せさせていくのではなく、こんな短時間でいっぺんに、暴力的なまでに私の崩壊を見るのが、私にはとても忍びなかった。だが、彼がものの数分で少ない実を食べ終わると、私はもうどうでもよくなった。いずれはこうなった。それに死んだ時点ですでにこれは私の所有を離れている。……そう言い聞かせて私は諦めたが、彼はそれだけでは飽き足らず、今度は私の肋骨に、大胆に齧りついた。

そのときだった。私の霊体に、衝撃的な激痛が疾ったのは。その箇所は、間違えようもない今彼が噛み砕いた、肋骨の部分だった。

そんな私の様子には少しも気に留めず、彼は私の骨を貪り続ける。バキッ、ボキッと音をあげて、私の骨が破壊されていく。彼が喰う度に、喰われた箇所に押さえきれぬ痛みが支配し、永劫続くと思えるほど残留する。

やめろ、やめてくれ！

私はすでに肉のほとんど残らぬ肉体が喪失するのには、なんの抵抗も感じなかった。だが、私の、唯一死後も形として残るはずであった肉の残骸たる骨が、齧られ、砕かれ、咀嚼され、嚥下されてい

く。通常なら墓に入り形として残り継がれていくそれが、完全に原型を破棄する。それも形容できぬ痛みを伴って。

やがて頭蓋が砕かれた時、私はその恐怖と痛みのない交ぜになった、発狂しそうなほどのハーモニクスを聴きながら、突如、ある考えが閃くのを、ちゃんとそうであると認識したのではないまでも本能において把握できた。

死後の究極の無我とは、食物連鎖の中に組み込まれることなのではないだろうか。死した人や、その他の動物はすべてなんらかの形で養分として大地に、空に、海に染み渡っていく。一部は骨として世界に残ることもあるだろう。一部は蝿に蝕まれたり、養分として腐肉がとけだしたりもするだろう。だが自分は、特に自分の自我の損した脳髄は、生きた事を証すまでもなくこの世に残留し続ける。行き続ける。生きる事は本能に渇望され、理性が護るもので、死は理性が恐怖し、本能以上のなんらかにより、自我を剥ぎ取られ、境地よりもさらに奥まった無我が与えられる。

……痛みが私の意識を、自我を奪って行く。眠りに落ちるかのように優しいこの世界の喪失の最中、私は強く確信した。

私は、生きているのだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9192g/

骨

2010年11月25日17時30分発行